



企業訪問レポート

多くの依頼を解決し多彩な実績を誇る宮大工のプロ集団

たきがわ じしゃけんちく
株式会社瀧川寺社建築 奈良県桜井市

飛鳥時代に中国大陸からもたらされた寺社建築技法の伝統を現在まで連綿と受け継ぐ「宮大工」。『株式会社瀧川寺社建築』は、そうした宮大工 25 名を正社員として雇用する全国的にも珍しい組織体制の工務店である。

木でつくられたものであればどんな依頼も何とかして解決する姿勢を徹底し、100 件以上の国宝・重文をはじめ全国で多くの神社仏閣の修理、建築を手掛けてきた宮大工のプロ集団である同社。伝統的木造建築の技術を未来へ継承するため、若手宮大工の育成にも力を注いでいる。

会社概要



会社名：株式会社瀧川寺社建築
所在地：奈良県桜井市橋本 463
電話：0744-43-1383
FAX：0744-42-7073
法人設立：1992（平成 4）年 9 月
代表者：代表取締役社長 瀧川 伸
資本金：2,000 万円
従業員：33 名（パート含む）
事業内容：伝統的木造建築の復原・設計・
施工、寺社の建造物の維持管理
URL：<http://www1.ocn.ne.jp/~t-jisha>

会長はわが国を代表する宮大工

地元桜井市で宮大工の家系の三代目に生まれた瀧川昭雄会長（81 歳）が、1980 年に家業の「瀧川工務店」を継いだのが同社の起こり。1992 年に、個人経営だった工務店と設計事務所を一つにして株式会社化し、現在の社名となった。瀧川会長は、文化庁長官賞、ものづくり日本大賞内閣総理大臣賞、旭日単光章など受賞歴多数の、わが国を代表する著名な宮大工である。

その瀧川会長がかつて寺院の修理作業等の指導でモンゴルや中国を訪れた際、転機となる出来事があった。日本では宮大工に普通に受け継がれている伝統的技法が現地では断絶しており、一からの技術指導となったのだ。この経験を通じ技術継承の重要性を痛感した瀧川会長は、「若い宮大工を育てることが世間への恩返し」だと、同社での後進の育成にさらに力を注ぐようになった。

多くの有名寺社工事を通じ腕を磨く

宮大工が習得する基本技術である「規矩術」は、直角に曲がった金属製の物差し「曲尺」一本のみで、縦・横・斜めに複雑に絡み合う部材の接合や、曲線や円などの造形を実現するという、非常に高度な木材加工技術である。そのため、一般住宅を手掛ける通常の大工と宮大工とは、その技能や習得すべき技術内容が異なる。

寺社等の木造古建築は通常、50 年ごとに小修理、200～300 年ごとに大修理を繰り返してその建物を後世に守り伝えていく。奈良県内の国宝建造物は 64 件と全国（218 件）のほぼ 3 割を占め、京都府（48 件）を抜いて全国最多なことから、奈良県では修理等の機会も多く、同社の若手宮大工は、そうした修理を通して伝統的な技術を習得



社員一同。宮大工は 18 歳から 70 歳代まで 25 名在籍し、平均年齢は 30 歳代。同社の実績や技術力の高さは全国的に有名で、遠方から入社する宮大工志願者も多い。

していく。

同社の過去の実績は、平城宮跡の朱雀門と第一次大極殿正殿の復原工事や、東大寺、法隆寺、長谷寺、室生寺、石上神宮、住吉大社、東京の椿山荘三重塔等の有名寺社建築の修理など全国に及び、現在は興福寺中金堂復元工事（2009年開始、2018年完成予定）等のプロジェクトを請け負っている。



長谷寺本願院（桜井市）の上棟式の様子。伝統の通り、大工棟梁の振幣の合図と共に、棟上で天の矢・地の矢の脇で槌を打つ「槌打ちの儀」を行う。

設計・施工両部門を備え一貫体制を構築

同社の特長の一つとして、設計部門と施工部門の両方を社内に備え、一貫体制でどんな注文にも柔軟に対応可能な点がある。瀧川会長の長男で、創業より四代目を数える現社長の瀧川伸氏（47歳）は、大学で構造建築、大学院で古建築を学び、一級建築士の資格を取得。主に設計部門の統括とトップ営業を手掛けている。

現在、一級建築士は瀧川社長も含め3名在籍。現場で監理技術者としての業務が可能な「1級建築施工管理技士」も、10名近い宮大工らが取得している。社内にはその他にも様々な資格取得者が多く、皆働きながら夜間の資格学校に通うなど自己啓発に熱心だという。

「不易流行」の精神で新しい変化も取り込む

好奇心旺盛なアイデアマンでもある瀧川社長が好きな言葉は「不易流行」。残し伝えるべき本質的なものは大切にする一方で、変えるべきものを新しく取り入れることも重要だという意味で、同

社においては、宮大工の伝統を守り後世へ伝えつつも、技術革新等新たなことにも積極的に取り組む姿勢を常に心がけている。

例えば瀧川社長は、古代からある掘立柱構造の木柱を腐らないようにするため、地面に浅く金属部品を設置しそこにステンレスで保護した木柱を差し込む工法を考案、これで特許を取得した。また自社のPRを兼ねて施主にプレゼントしている「枅」のデザインは、日本と中国で意匠登録済みだ。

こうした進取の気風と、「形のないものを形にするのが職人。最初から形のある部品を組み立てるのはただの組立作業」（瀧川社長）という宮大工の仕事への誇りが同社には併存しており、業界の中で確かな地位を築く強みとなっている。



瀧川社長がデザイン・製作した「斗栱」（軒などを支える部材）を模した枅（左）、同じく金銀銅箔を施した枅（右）。部材を円形にくり抜くことで、隅ではなく正面から飲める枅にと工夫を施し、枅の大きさ・容量を変えることにより「斗枅五合ますますはんしゅう」「一笑繁盛いっしょうはんじょう」といった洒落た名前で商標登録もしている。

依頼を何とかして解決する姿勢を徹底

このような仕事への取り組み姿勢が評価されて同社への依頼は引きも切らず、案件は常に10件程度が同時進行し、首都圏をはじめ全国各地での仕事も増えてきている。

高い評価の理由について、瀧川社長は「すぐに動くフットワークの軽さや、依頼を何とかして解決する姿勢を徹底していることが、施主様に“安心して任せられる”と思って頂けているのでは」と分析する。

しかし目の届く範囲で全ての進捗を管理する必要があるので、「今が適正な業容なので拡大するつもりはない」（瀧川社長）。何百年も後世に残る良い仕事を、今後も楽しみながら着実に手掛けていきたいという。（吉村謙一、島田清彦）